

no matter DP の指定文省略分析*

佐藤元樹

1. はじめに

本稿では、*no matter the weather* (どんな天気であろうと) のように、*no matter* の直後に潜伏疑問の名詞句が続く譲歩表現 (以降、*no matter DP*) の文法的特性について考察する。この用法は、2006年頃を境に学習英和辞典にも記載されるようになった比較的新しい表現である。この新しい用法には、文法的に二つの興味深い点がある。第一に、本来は名詞である *no matter* が、前置詞などの介在なしに、直後に名詞句を選択しているという下位範疇化の違反が起きているという点である。第二に、*no matter* に後続する DP は、定冠詞や所有格を伴う形式が典型であり、*no matter him/John* のような人称代名詞や固有名詞の使用が許されないという意味的制約がある点である。本稿では、これらの文法的特性を説明する手がかりが、*no matter* の小節補部にあることを論じ、*no matter DP* が指定疑問文から部分的省略によって派生された表現であることを示す。

2. *no matter* の小節補部

Culicover (1999, 2013) は、*no matter* の補部には *wh* 疑問文の小節が許されることを指摘している。

- (1) You need to go outside, *no matter what the weather*. (Culicover 2013: 121)

彼はこの小節を指定文 (predicational sentence) として分析し、その小節主語には、定総称名詞 (definite generic) が置かれると述べている。

- (2) *no matter* [Predicate [+wh] NP]
where reference of NP is a definite generic. (Culicover 1999: 118)

そのため、代名詞や固有名詞、不定総称名詞が主語となる以下のような例は、不適格となる。

- (3) a. *no matter how tall he* *(is) [代名詞]
b. *No matter how important Bill Clinton* *(may be), he's not coming to my party. [固有名詞]
c. You shouldn't use the elevator, *no matter how tall a building* *(may be). [不定総称名詞]
(Culicover 1999: 109-111)

しかし、Culicover (1999, 2013) が指摘した主語の意味的制約は記述的一般化に過ぎず、指定文一般には当てはまるものではない。

ところが、ここで注目すべきことは、*no matter* の主語に課せられる意味的制約が、Baker (1968) 等によって議論されてきた潜伏疑問の特徴と一致するという点である。例えば、固有名詞、人称代名詞、不定総称名詞は、以下に示すように、潜伏疑問を形成することができない。

- (4) a. #John forgot *her*, but he never forgot her face and manner. [代名詞]
(Cf. John forgot who she was, but he never forgot her face and manner.)
b. *John wouldn't tell us *Lyndon Johnson*. [固有名詞]
(Cf. John wouldn't tell us who Lyndon Johnson is.)
c. *John can't remember *a llama*. [不定総称名詞]
(Cf. John can't remember what a llama is.) (Baker 1968: 90)

このように、*no matter* の小節主語に課せられる制約は、潜伏疑問と共通しており、*no matter* の補部選択の背後には、潜伏疑問の成立条件が関わっていることが示唆される。そこで、本稿では、潜伏疑問がもつ指定疑問文の抽象的構造を援用し、*no matter* が選択する小節補部と名詞補部を平行的に捉える分析を提案する。

3. 潜伏疑問

潜伏疑問は、名詞の形式でありながら、意味的には、同定疑問文 (Who/What X is?) の解釈をもつ表現である。最近の研究では、潜伏疑問が持つ同定疑問文としての解釈は、指定文 (指定疑問文) に由来するとされ、指定文の主語と潜伏疑問は、どちらも個体概念 (<s, e>タイプ) であることが指摘されている (Heim 1979, Romero 2005, Nathan 2006, Frana 2017)。したがって、(4)に示すように、個体概念に該当しない指示的な代名詞や固有名詞、あるいは種を表す名詞は潜伏疑問を形成することができない。これは、no matter の補部にあらわれる DP に関してと同じである。次節では、no matter の小節補部に、指定文を仮定する分析を提案する。

4. 指定文省略分析

前節までの考察を踏まえ、本稿では、no matter DP が指定疑問文の構造から述語成分が「省略」されることで派生されると提案する。具体的には、(1)は、以下の構造を持つ。

(5) no matter [CP what_i [SC(small clause) the weather t_i]]

(5)は、no matter が指定文の小節補部を選択していることを意図している。指定文の構造にもとづく、小節主語の the weather が個体概念 (<s, e>タイプ)、疑問詞 what に対する答えが e タイプに相当する。これにより、Culicover が指摘していた小節主語名詞の意味的制約が捉えられる。

さらに、(5)の指定文の小節構造から what を「省略」することにより、no matter DP が派生される。ここでは、技術的に、空演算子の移動によって、what の無音声化が起きると仮定する。

(6) no matter [CP Op_i [SC the weather t_i]]

本分析により、no matter DP の直後に名詞句が続く理由が、下位範疇化に違反することなく説明される。no matter は一貫して小節を補部を選択しており、その主語が表面上の DP として現れているに過ぎない。したがって、no matter DP では、下位範疇化の違反は起きていないと説明される。また、その DP が典型的には定冠詞や所有格を伴う表現になることは、指定文の主語の文法的性質によって説明される。no matter に後続する DP は、指定文の主語となる個体概念であるため、必然的に、the NP や one's NP といった形式になる。一方で、意味タイプが異なる固有名詞や代名詞は、no matter DP の用法では排除される。このように、no matter に後続する DP が潜伏疑問に相当するという直感は、その背後にある指定疑問文の構造から捉えられる。

5. 結論

本稿では、no matter DP が指定疑問文に由来する潜伏疑問であることを示した。本分析によれば、no matter what DP と no matter DP はそれぞれ独立した構文ではなく、指定疑問文という共通の構造基盤から派生した現象として捉えられる。これにより、no matter DP が示す一見したところ、特殊にも見える文法的特性は、英語の一般的性質から説明される。

参考文献

- Baker, Carl Lee (1968) *Indirect Questions in English*, Doctoral dissertation, University of Illinois.
- Culicover, Peter W. (1999) *Syntactic Nuts: Hard Cases, Syntactic Theory, and Language Acquisition*, Oxford University Press, Oxford.
- Culicover, Peter W. (2013) *Grammar and Complexity*, Oxford University Press, Oxford.
- Frana, Ilaria (2017) *Concealed Questions*, Oxford University Press, Oxford.
- Heim, Irene (1979) "Concealed questions," *Semantics from Different Points of View*, ed. by Rainer Bäurle, Urs Egli and Arnim von Stechow, 51-60, Springer, Berlin.
- Nathan, Lance Edward (2006) *On the interpretation of concealed questions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Romero, Maribel (2005) "Concealed questions and specificational subjects," *Linguistics and Philosophy* 28, 687-737.

* 本研究は JSPS 科研費 24K03941 の助成を受けたものです。